東京大学総合研究博物館所蔵の鳥居龍蔵関係遺物について

－出自不明の中国陶磁に関する若干の考察－

The Artifacts Related to Torii Ryuzo, Stored in Tokyo University Museum

－A Study on the Unidentified Chinese Ceramics－

片桐千亜紀・新垣力

KATAGIRI Chiaki・ARAKAKI Tsutomu

ABSTRACT: This paper introduces the artifacts collected by Torii Ryuzo, now stored in the Tokyo University Museum. The entire group of archaeological artifacts related to Okinawa in the museum storage was fully surveyed and studied by Asato Shijun. Classification and drawing was carried out on the collection No. C-12-12 in November 25, 2003. This collection consists of Chinese ceramics (except for one Okinawa product), including bowl, plate, large dish, deep bowl and jar, dating from around the late 14th to the early 15th century. This group of material was inventoried as "surface collection in Yaeyama?", but, considering the fieldwork of Torii, it is also possible that these ceramics were collected underwater adjacent to the Omono *Gusuku*.

1. はじめに

1904年に初めて沖縄を訪れた鳥居龍蔵氏は，沖縄本島・宮古・八重山と精力的に人類学調査を行った．このときに発掘または表採した遺物は，現在東京大学総合研究博物館に収蔵されている．

これらの資料には未発表のものも多数含まれるため，安里嗣淳氏は当該資料についてコンテナの分類・集計や写真撮影を行い，今後の研究の基礎資料とした（安里1994，安里他1997）．安里氏の調査により，今日我々は簡易に同博物館が収蔵する沖縄関係考古資料の詳細を知ることが可能となっている．

今回我々が注目した資料は，整理番号がC-12-12と記されたコンテナである．このコンテナには陶磁器のみが収められているが出自が明らかではなく，安里氏によって「おそらく鳥居が明治37年に八重山諸島を探訪した際に，川平貝塚か大浜のフルスト原遺跡等で表採したものではなかろうか．」と紹介されている．

2003年11月下旬，機会を得て東京大学総合研究博物館が収蔵するコンテナ番号C-12-12の遺物を観察することができた．短い時間であったが，可能な限りの観察と分類・実測を行ったため，ここに報告しておきたい．

2. 遺物紹介

コンテナ番号C-12-12の整理方法として，まず器種による分類を行い，さらに器形による細分類と集計を行った．それぞれの細分類については，最も特徴的な遺物の実測を行い図示した（時間の制約から見込の印花文などはスケッチで行った）．分類の点数は集計表に，個々の遺物の細かい観察事項については観察表として表にまとめた．写真については安里氏らが詳細な撮影を行っている（安里他1997年）ため，それらと観察表で対応できるようにした．

資料は総数69点の陶磁器で，沖縄産陶器の１点（荒焼．外面に貼付の牡丹？がみられる厨子甕の胴部か．知花焼との所見あり）を除き，すべて中国産の青磁であった．器種は碗・皿・盤・鉢・酒会壺が確認されたが，碗が54点と全体の約８割を占めている．以下にそれぞれの分類概念を述べる．

碗（1～9）

A類：外反口縁のもの．器形や施釉方法などにより２種に細分される．

Ⅰ　釉を全面に施釉した後，外底を蛇の目状に釉剥ぎするもの．内底に印花文を施す（1～4）．

Ⅱ　釉を高台外面まで施釉した後，内底を釉剥ぎするもの．内底に印花文を施す（5）．

B類：直口口縁のもの．器形や文様などにより３種に細分される．

Ⅰ　外面に雷文帯を廻らせるもの．内底に印花文を施す（6）．

Ⅱ　外面に鎬のない蓮弁文を描くもの．内底に印花文を施す（7，8）．

Ⅲ　外面に細蓮弁文を描くもの．内底に印花文を施す（9）．

皿（10）

10は口折皿の底部と考えられる資料である．内底にスタンプによる文様を施す．

盤（11～14）

A類：鍔縁口縁のもの．内面に蓮弁文を描く（11）．

B類：直口口縁で口縁端部を肥厚させるもの．両面に唐草文などを描く（12）．

盤底部：「臥足」と称される底部形態を呈するもの（13）と高台をもつもの（14）とがある．

鉢（15）

15は直口口縁を呈する鉢の口縁部資料である．両面に唐草文などを描く．これ以外にも底部の可能性を持つ資料があるが，今回は盤の底部として扱った．

酒会壺（16）

酒会壺は16に示した１点のみ確認された．外面に牡丹唐草文などを描く．

第１表　集計（青磁）

器種	分類		点数			計
			口	胴	底	
碗	A	Ⅰ	0	0	32	32
		Ⅱ	0	0	4	4
	B	Ⅰ	0	1	5	6
		Ⅱ	1	0	6	7
		Ⅲ	0	0	3	3
皿	なし		0	0	2	2
盤	A		1	0	7	9
	B		1			
鉢	なし		1	1	0	2
酒会壺	なし		1	0	0	1
不明	なし		0	2	0	2
総計						68

※沖縄産陶器を除く

写真１　実測風景

3. 結び

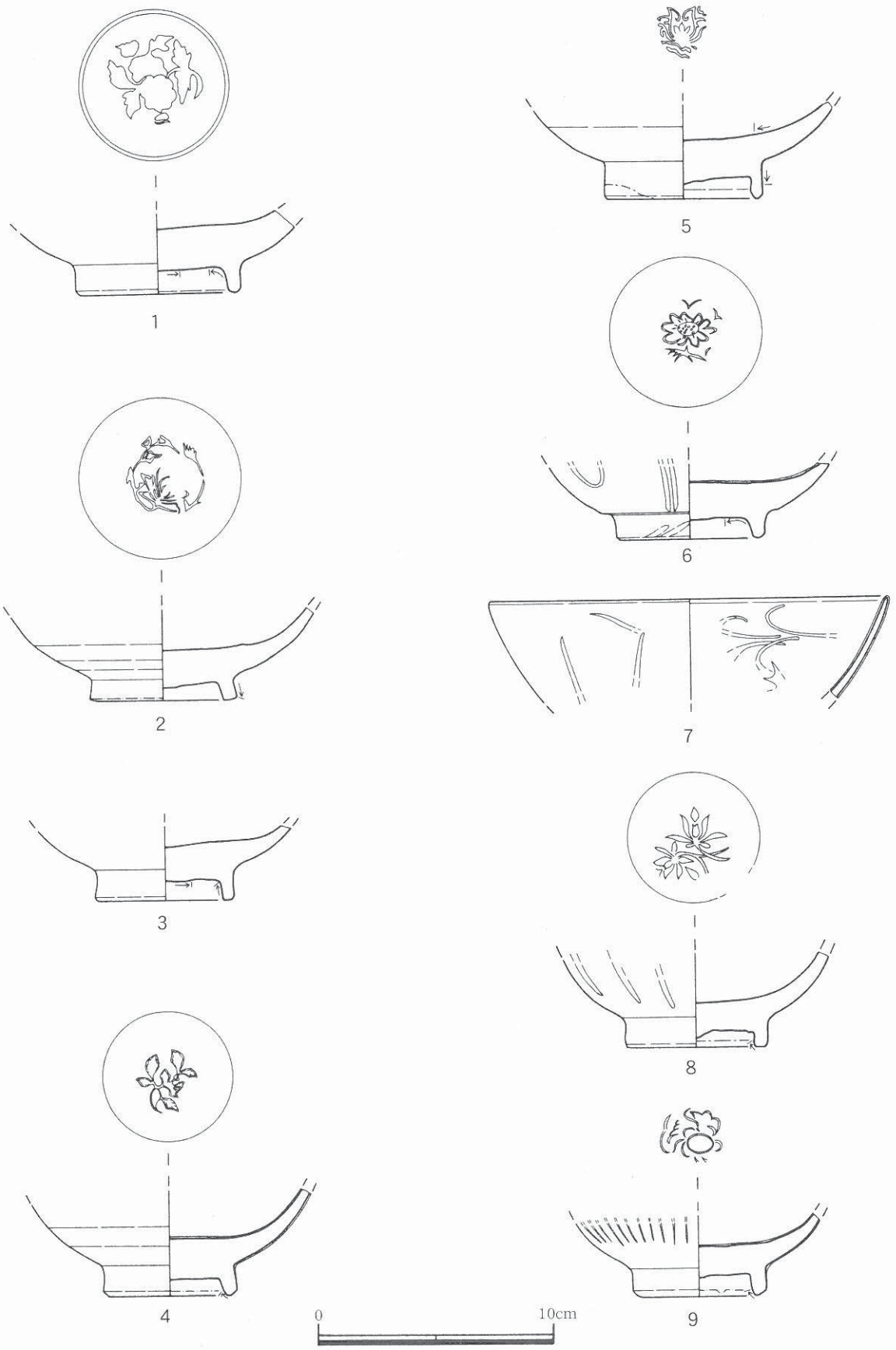
以上のように，コンテナ番号C-12-12に収納されている遺物は，沖縄産陶器の１点を除けば，14世紀後半～15世紀を中心とした青磁のみである．産地は龍泉窯系のものや福建・広東系と思われるものなど多岐にわたる．器種も豊富で保存状態が良く，大形の破片が大半を占める．

ここで，この遺物群の出自について考えてみたい．鳥居氏はその報告「八重山の遺跡に就て」其の四の中（鳥居1926）で御物グスクについて触れている．御物グスクとは海外貿易の物貨を収めた公倉で，古くは那覇港内の海上に孤立して存在していた．創建年代は不明だが，文献記録では尚泰久６（1459）年に金丸が御物城御鎖側官に任ぜられたのが初見であり，時代は遡るが尚金福代（1450～

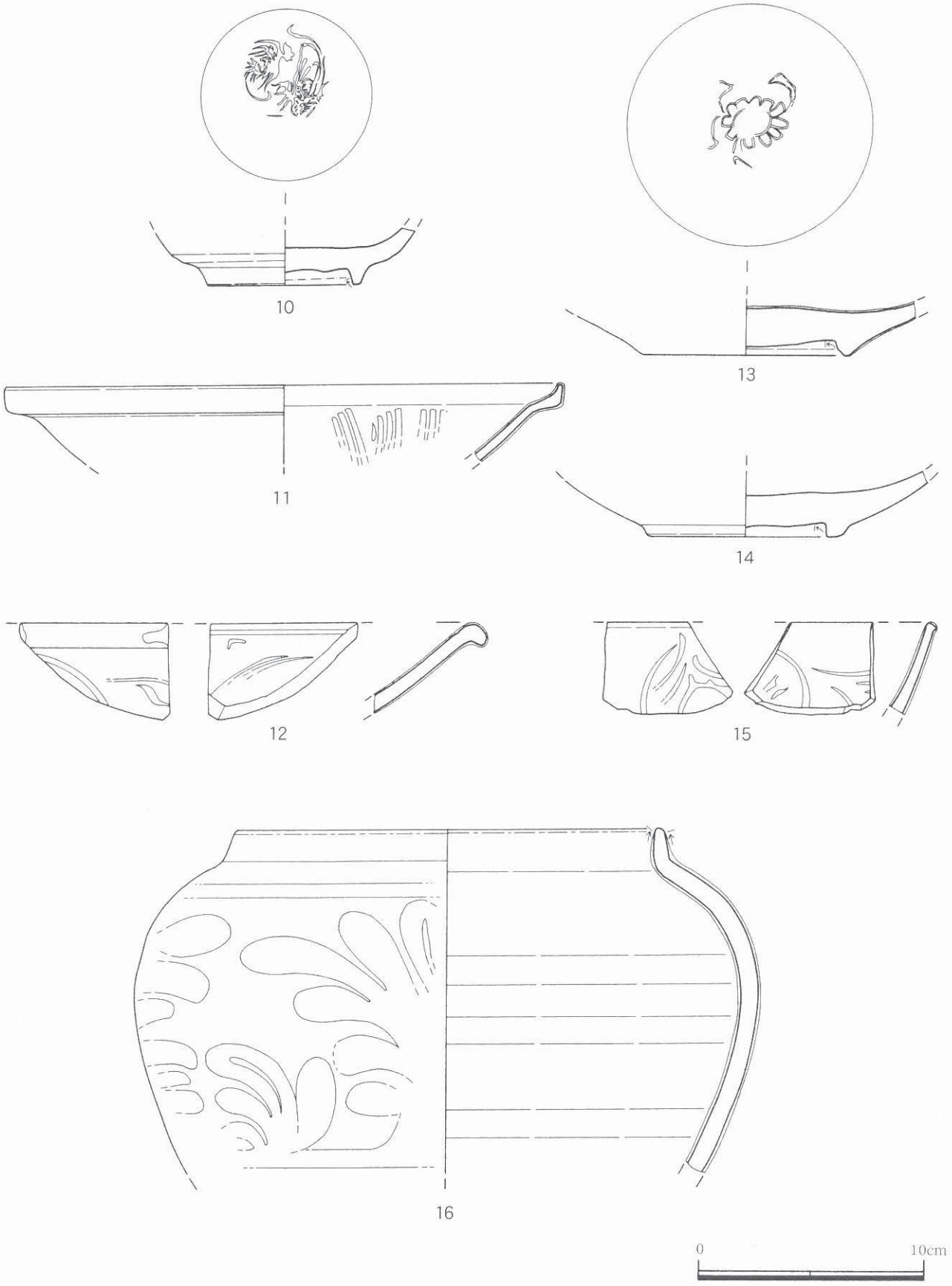
第２表　観察一覧（青磁）

番号	器種・分類	部位	口径	器高	底径	観察所見	写真対応表
1	碗／ＡⅠ	底	—	—	6.6	素地は灰白色の微粒子．緑色の釉を両面に施釉後，外底を蛇の目状に釉剥ぎ．内底に圏線を廻らし，その中に印花文（牡丹？）を施す．外底に焼台が溶着．	Ｐ185－19 右
2		底	—	—	5.5	素地は灰色の細粒子．淡灰緑色の釉を両面に施釉後，外底を蛇の目状に釉剥ぎ．内底に陽圏線を廻らし，その中に印花文を施す．	Ｐ186－20 左
3		底	—	—	5.6	釉薬を両面に施釉後，外底を蛇の目状に釉剥ぎ．内底に印花文を施す．外底に焼台が溶着．	Ｐ175－９ 左
4		底	—	—	5.2	淡緑灰色の釉を内底から高台内面まで施釉．内底に圏線を廻らし，その中に印花文を施す．細かい貫入あり．	Ｐ187－21 左
5	碗／ＡⅡ	底	—	—	6.3	素地は橙色の細粒子で軟質．黄緑灰色の釉を内底から高台外面まで施釉後，内底を円形に釉剥ぎする．内底に印花文（蓮）を施す．両面に気泡がみられる．福建産？	Ｐ197－31 左
6	碗／ＢⅠ	底	—	—	5.8	素地は灰白色の微粒子．濃緑灰色の釉を両面に施釉後，外底を蛇の目状に釉剥ぎ．外面にラマ式蓮弁文を描く．内底に陰圏線を廻らし，その中に印花文（菊？）を施す．	Ｐ181－15 左
7	碗／ＢⅡ	口	17.0	—	—	素地は灰白色の微粒子．緑灰色の釉を両面に施釉．外面に蓮弁文を描く．内面に唐草文？を描く．	Ｐ171－５ 右下
8		底	—	—	5.8	素地は灰白色の細粒子．暗オリーブ灰色の釉を内底から高台内面まで施釉．外面に蓮弁文を描く．内底に陰圏線を廻らし，その中に印花文（束蓮文）を施す．両面に荒い貫入あり．	Ｐ176－10 右
9	碗／ＢⅢ	底	—	—	4.7	素地は灰色の微粒子．灰緑色の釉を両面に施釉後，外底を蛇の目状に釉剥ぎ．外面に細蓮弁文を描く．内底に印花文（捻花文？）を施す．	Ｐ178－12 右上
10	皿	底	—	—	6.7	緑色の釉を内底から畳付まで施釉．内底に陰圏線を廻らし，その中にスタンプによる鳳凰文を施す．外底に焼台が溶着する．	Ｐ192－26 左
11	盤／Ａ	口	25.0	—	—	素地は灰白色の細粒子で緻密．緑灰色の釉を両面に施釉．内面に４本櫛による蓮弁文を描く．両面に貫入がみられる．	Ｐ171－５ 右上
12	盤／Ｂ	口	—	—	—	素地は白灰色の微粒子で緻密．緑灰色の釉を両面に厚く施釉．両面に唐草文を描く．	Ｐ171－５ 左上
13	盤	底	—	—	9.0	素地は灰橙色の細粒子．淡緑色の釉を内底から高台内面まで施釉．内底に陽圏線を廻らし，その中に印花文（菊？）を施す．	Ｐ193－13 左
14		底	—	—	8.2	緑灰色の釉を内底から高台内面まで施釉．外底に焼台が溶着する．	Ｐ195－29 左
15	鉢	口	—	—	—	素地は白灰色の微粒子で緻密．緑灰色の釉を両面に厚く施釉．両面に唐草文を描く．	Ｐ171－５ 左下
16	酒会壺	口	19.0	—	—	素地は灰白色の微粒子で緻密．濃緑灰色の釉を両面に施釉後，口唇部を釉剥ぎ．外面に圏線・牡丹唐草文を描く．内面に石灰が付着．両面に荒い貫入がみられる．	Ｐ171－４

※写真対応表は史料編集室紀要第22号「東京大学総合研究博物館収蔵の沖縄関係考古史料写真一覧」のページとその写真番号及び位置を対応させたものである。



第１図　青磁①



第２図　青磁②

1453）の古絵図には「宝庫」と記されている（東恩納1950）．鳥居氏はこの御物グスク付近の海底から青磁を採集し，東京で寺山啓介氏とともに検討した結果15・16世紀の広東青磁と位置づけた．鳥居氏がこの中で御物グスク周辺の海底で表採した青磁について触れた理由は，八重山の川平貝塚等で発掘した遺物群との比較をするためである．

ところが，その遺物が東京大学総合研究博物館で確認されていない．鳥居氏が八重山の川平貝塚等で発掘した遺物は土器・石器・貝器・石台などで，青磁がやや上の方から出土したとされている．安里氏の調べでは，これらの遺物はコンテナ番号C-12-13に収納されていると考えられており，遺物の構成も鳥居氏の報告と一致する．しかし，コンテナ番号C-12-12は前述したように沖縄産陶器を除けば青磁のみであり，かつ酒会壺というグスクで確認される器種を含むことから，鳥居氏が御物グスク周辺の海底で表採した遺物群（鳥居1926・1953）という可能性もあるのではなかろうか．

現在，御物グスクは那覇軍港敷地内にあり立ち入りが困難となっているが，御物グスク関係遺物は沖縄県立博物館に収蔵されている．これらは1960～1962年にジョージ・H・ケア氏によって採集されたもの（亀井1983）と，1970年代に琉球陶磁研究会や沖縄県教育庁文化課によって調査された際の遺物である（新田1977）．筆者らが県立博物館にて当該資料を実見した結果，文様や器種組成などに東大資料との類似点が多くみられた．今後，実際に御物グスク周辺の海底調査を行うことができれば，遺物群を比較検討することでコンテナ番号C-12-12の出自を明確にできると思われる．

今回の調査を可能にしたのは安里嗣淳所長の行った詳細な集成の賜物であり，多大な敬意を表したい．沖縄県立博物館の仲座久宜氏には御物グスク関係遺物の実見のための便宜を図っていただいた．また，現地調査が円滑に進んだのは当センターの宮平真由美氏，天久朝海氏の協力によるものである．最後に，今回の報告では東京大学総合研究博物館長　高橋進教授及び諏訪元教授のご厚意により，所定の手続きを経て遺物の実測や写真撮影ならびに当センターの紀要への紹介の許可をいただくことができた．末尾となりましたが，記して感謝申し上げます．

（かたぎり　ちあき：調査課　専門員）
（あらかき　つとむ：調査課　嘱託員）

引用・参考文献

安里嗣淳　1994年　「東京大学総合研究資料館所蔵の沖縄関係考古資料」『史料編集室紀要　第19号』沖縄県立図書館史料編集室

安里嗣淳・丑野毅・小田静夫・新里康　1997年　「東京大学総合研究博物館所蔵の沖縄関係考古史料」『史料編集室紀要　第22号』沖縄県教育委員会

亀井明徳　1983年　「グスク採集の輸入陶磁」『沖縄出土の中国陶磁（下）－ジョージ・H・ケア氏調査収集資料－』沖縄県立博物館

鳥居龍蔵　1926年　「八重山の遺跡に就て」『有史以前の日本』磯辺甲陽堂（『沖縄県史料　考古関係資料１』所収）

新田重清　1977年　「基地内文化財調査概要－御物城の考古学的知見－」『沖縄県立博物館紀要　第３号』沖縄県立博物館

東恩納寛惇　1950年　『南島風土記－沖縄・奄美大島地名辞典－』沖縄文化協会・沖縄財団（『東恩納寛惇全集　７』所収）